



テトラクリスタルアイランド

時間帯は夜。

島の住人達は明日に備え、今日も夢の中。

ストレンジャー達も同様に夢の中。

だが不穏な影が、島をさまよっていた。

<どこだ・・・>

体の形が安定できず、アメーバのように地面を這って探す人影が。

暗闇の中の森を、静かにさまよっていた。

<どこにいる・・・！>

夜にそんなことが起きているとも、島の住人達は気付かず、朝がやってきた。

「ううーん。」

本日もストレンジャーが島で一番早く起き、窓から外の様子を見た。

空は綺麗な青空が広がっており、快晴でいい天気。

過ごしやすい気候だった。

「今日もいい天気だな。」

「うーん。」

同じく同室で寝ていたビリーブも目が覚め、目を擦りながら起き上がった。

「おはよう、ビリーブ。」

「おはようございます、ストレンジャーさん。」

ビリーブは体を伸ばし、寢床から起き上がった。

「今日もお早いお目覚めですね。」

「ああ、やっぱり春だからかな、早めに起きたみたいだ。」

ストレンジャーは外の様子を見つつ言った。

ビリーブも窓の近くへ。

「まだ朝早いですね。 朝日が海の中です。」

太陽はまだ海から完全に出ておらず、まだ下の部分が見えなかった。

「せっかく早起きしたんだし、散歩でも行くか？」

「はい。」

二人の意見が合い、朝の散歩に出かけていった。

「うーん。 やっぱり朝は過ごしやすくていいな。」

ストレンジャーは歩きながら背中を伸ばしつつ言った。

「そうですねー 今日もいい天気で海風が涼しいです。」

ストレンジャーの隣を歩いているビリーブはそう言った。

海岸にはまだ誰の姿も無く、二人だけの貸切状態だった。

二人の会話以外は、波の音しか聞こえない。

だが別の場所で怪しくうごめく姿が。

<見つけたぞ！！>

声にならない叫びを上げつつ、夜の間活動していたアメーバがストレンジャーとビリーブの姿を発見し、呻いた。

二人は楽しそうに会話をしつつ海岸を歩いていた。

<忌々しい獣どもめ！>

アメーバはそう言うと、体の形を変化させ、ボウガンのような形になった。
海岸を歩くストレンジャーとビリーブは気がつかず、会話をしつつ歩いている。

<私の最後の力で、呪われるがいい！！>

そうするとボウガンの矢は、ビリーブの体を狙って放たれた。

バシュッ！

「？ 何の音でしょうか。」

ビリーブは不意に聞こえた音に気がつき、辺りを見回した。
だが周りには何も無い。

「どうした？ ！」

ストレンジャーはビリーブの方へ向くと、ビリーブに向かって矢が飛んでくるのが見えた。

「いえ、何か音がしたように思えたので。 え？」

ストレンジャーはとっさにビリーブを押してその場から退かした。
するとビリーブを狙っていた矢が、ストレンジャーの胸に突き刺さった。

「クッ！！」

「いたたた。 ストレンジャーさん何を・・・ ！！」

ビリーブはストレンジャーに押され砂浜にしりもちをつきつつストレンジャーを見た。
するとストレンジャーの胸に黒い矢が突き刺さっていた。

「ストレンジャーさん！！」

ストレンジャーはその場に崩れ、方膝をつくように座り込んだ。
ビリーブはストレンジャーを支えつつ、視線を感じ、その方向を見た。

「誰ですか！　こんなことをしたのは！」

ビリーブは視線を感じた方向を見つつ言った。
だがそこにはアメーバ以外は何もいなかった。

<チッ、運のいい奴め。　だが呪いを受けたことには変わらない。　よしとするか。>
「アメーバ、貴方はいったい何をしました！！」

ビリーブはアメーバを睨みつつ言った。

<フッ、あの時の恨みだ。　忘れたわけではあるまい？>

アメーバは姿を変え、ビリーブの見たことのある姿へ変わった。

「貴方！　あの時の！」

<そうだ！　あの時にお前の矢とそいつの放った水晶に殺された者だ。　いい光景だな。>

「ストレンジャーさんに何をしました！」

<ただの呪いさ。　だが俺の全命を賭けて放った呪い。　矢を喰らった者は、力を失いつつ、死んでいく呪いをな。>

「死の呪い・・・！」

ビリーブはそう言われ、矢を抜こうとしたが矢は消えてしまい、ストレンジャーの体の中へ入ってしまった。

<遅かったな。　私の呪いはそいつの中へ入った。　やがて力をじょじょに失い、そいつは死ぬ！！>

「そんなこと、させません！！」

ビリーブは札を召還し、ストレンジャーに当てた。

ボンッ！

「え！？」

だが札はストレンジャーに触れる前に燃え尽き、消えてしまった。

「札が・・・」

<残念だが命を賭けて放った呪いだ、お前の今の力では消すことも弱めることも出来ない。 ハ
ハハハハ！！！！>

そう言うと、アメーバは高笑いをしつつ消えてしまった。

「ストレンジャーさん。 大丈夫ですか？」

「ああ、とりあえずはな。」

ストレンジャーは矢を喰らったが、目を覚まし、ビリーブを見た。

「ごめんなさい。 僕のせいで。」

ビリーブはそう言いつつ涙を流した。

「気にすんな。 ビリーブは平気か？」

「はい。」

「あいつの言っていた事が本当なら、俺は死ぬのか。」

ストレンジャーは立ち上がり、胸を見つつ言った。

ストレンジャーの胸からは、黒い靄が出ていた。

「僕がしっかりしていたら、こんなことには。」

「ビリーブは悪くないよ。 悪いのはあいつだ。」

「僕の力でも、消すことは出来ませんでした。」

ビリーブは涙を拭しつつストレンジャーに言った。
だが拭っても涙は流れてくる。

「ビリーブ、もう泣き止めよ。」

ストレンジャーは自分の手でビリーブの涙を拭いた。

「泣いたって、俺がどうにかなるわけじゃあないだろ？」

「はい。」

「俺はもう、誰の涙もみたくないんだ。 弱っている姿も。」

ストレンジャーはビリーブの顔を見つつ言った。

「だからもう、泣かないでくれ。」

「はい。」

ビリーブは自分の腕で涙をすべて拭った。

「俺は誰にも涙を流させないようにしたかったんだ、だが俺はまだ未熟だった。 またしても俺
なんかのために涙を流させてしまった。」

「ストレンジャーさんは悪くないです。 僕にもっと力があれば、貴方の事を助けられたのに。
」

「でも、お前しか頼る相手が、今はいないんだ。 この件は、俺とお前だけの秘密だ。」

ストレンジャーはビリーブの頭に手を置いて言った。

「ビリーブ。 俺の命、お前に託すぜ。」

「ストレンジャーさん。」

ストレンジャーはそう言うと、ビリーブをその場に置いて家へと戻っていった。
ビリーブはそんなストレンジャーの後姿を見つつ、決意した。

『貴方の思いどおりにはさせません。 僕の力で、ストレンジャーさんの命を守って見せる！！』

ビリーブは胸の前で拳を握り締め、ストレンジャーの元へ走っていった。

オリエンタルシティ

朝の散歩と事件を終え、ストレンジャーとビリーブは家に帰って食事を取った。
その後すぐ、ストレンジャーは花畑に水を遣りに行った。
ビリーブはというと、一旦島を離れて、オリエンタルシティにある図書館へやってきた。

「えっと、コレとコレと・・・ あ、コレもいいかな。」

ビリーブは手当たりしだい呪いに関する本と、破邪に関する本を集め、近くのテーブルで読み始めた。
昔ビリーブは、ビリーブの父の書物を読むことが多かったため昔の文字を読むことには苦勞せず、スラスラと読んで手がかりになりそうな事柄を探していた。
だがなかなか欲しい情報の書かれた本が見つからず、一度読んだ本を棚に戻した。

『やっぱりそう簡単には見つかりませんね。 ストレンジャーさんの事もあるから、早めに見つけないと・・・』

ビリーブは別の棚にあった本を読みつつ、ストレンジャーの事を考えていた。

「あらビリーブじゃない。 こんな所で何してるの？」

ビリーブが本を読んでいると、やって来たのはエミーだった。
手には料理雑誌と思われる雑誌を持っていた。

「ちょっと探し物をしてまして。」
「ずいぶんと古い本を読んでるのね。」

エミーはビリーブの読んでいた本の1ページの文字を読もうとした。

「ええっと、なんて読むのかしら・・・ これって古い文字よね？」

「はい。　そうですよ。」

「すごいわね、そんな本を読めるなんて。　私よりも年下なのに。」

エミーはビリーブの行動に感心しつつ言った。

「昔お父さんの書物を読むことがあったので。　古い字は読めるんです。」

「そうなの。　で、何を探してるの？」

ふと思い、エミーはビリーブに問いかけた。

「それは・・・ちょっと。　ごめんなさい。」

ビリーブは少々考え、エミーに謝った。

「あ、いいのいいの。　言いたくなかったら別に、気にしないで。　勉強頑張ってね。」

エミーは少々困りつつもそう言い、別の本の棚へ向かっていった。

ビリーブは再び、本を読み始めた。

『ええっと、どこまで読んでたっけ。』

テトラクリスタルアイランド

一方ビリーブが外出している頃、ストレンジャーは花に水をやり、島の散歩をしていた。

「うーん。　コレといってすることがないと、やっぱり暇だな。」

ストレンジャーは森の一角にあった岩の上に仰向けになり、空を見ていた。

「珍しい場所で日向ぼっこをしてるな、ストレンジャー」

ストレンジャーが空を見ていると、いつの間にかコレージが近くに立っていた。

「ああ、することが無くて暇だったからな。 散歩してたんだ。」

「最近はいいい陽気が続いているからな。 ま、昼寝にはちょうどいいか。」

ストレンジャーは顔を空に向けたまま、コレージに言った。

コレージは近くの木に寄りかかりつつ言った。

「コレージはどうしたんだ？」

「俺もストレンジャーと同類だ。 俺を狙う奴らや、目標の達成を終えた今、することが無いんだ。」

「じゃあお前も、昼寝だな。」

「そういうことだ。」

コレージはストレンジャーの近くへ行き、岩へ寄りかかった。

「日差しが暖かいな。」

コレージが日差しの暖かさを身にしみていると、後ろから寝息が聞こえてきた。

『ずいぶんと早いな。 疲れてたのか？』

コレージは後ろへ振り返りつつ、付けていたマントを取り、ストレンジャーに掛けようとした。だが寝ているストレンジャーの胸の辺りには、黒い靄が出ていた。

『？ なんだ？』

コレージは疑問に思い、靄に触れてみた。

だがただの靄であり、触れても特に感触は無かった。

靄を払っても、払われた靄がある一転の場所に集まり、取れそうに無い。

『変な物体だな。 スtrenジャーの身に何かあったのか。』

コレージは霽の事は一時置いて、寝ているストレンジャーに毛布代わりにマントを掛けた。

オリエンタルシティ

しばらく時間が過ぎ、夕方。

図書館にいた人々は段々と少なくなり、そろそろ閉館時間が迫ってきた。

「うーん。」

イスに座っていたビリーブは背筋を伸ばしつつ、イスから立ち上がった。

『収穫は無し、ですか。』

ビリーブは残念そうに思いつつ、読んでいた本を片しに行った。

すると、

「ん？」

ビリーブは片している本棚に、気になる本を見つけた。

少々大きめの本で、冊子には古い字で書かれていた。

「こんなの、さっきありましたっけ。」

ビリーブは持っていた本を先に片し、その本を取りページをめくった。

中には文字と、絵が描かれていた。

ビリーブは書かれている文字を読んでいると

『！！ これなら少し、時間を稼げるかも。』

ビリーブはその本を手に無料コピー機のところへ行き、ページを印刷した。

テトラクリスタルアイランド

印刷した紙を手に、ビリーブは島へと帰ってきた。

ワープゾーンを開くことは出来ないため、破魔矢に乗って空を飛んで帰ってきた。

家へ付くと、ストレンジャーがリビングにいた。

「お帰りビリーブ、どこに行ってたんだ？」

「ちょっと探し物です。いい情報を手に入れたので、ちょっと部屋に戻りますね。お夕飯は、後で。」

ビリーブはそう言うと、ストレンジャーの部屋に向かっていった。

「ビリーブさん、帰ってきたの？」

キッチンから母龍が顔を出し、ストレンジャーに尋ねた。

「ああ、ちょっとすることがあるからって、部屋に行ったけど。」

「まだ夕飯は食べてない口ぶりだったわね。今用意するから、ストレンジャー持って行ってあげて。」

「わかった。」

そう言うと、母龍はキッチンへ戻っていった。

ストレンジャーもキッチンへ向かっていった。

部屋へ戻ったビリーブは、筆を片手に札に文字と絵を描いていた。

先ほど印刷した紙に書かれている通りに。

文字とイラストを丁寧に。

すると

コンコンッ

不意にドアがノックされた。

「はい。」

「入るぜ。」

扉が開き、ストレンジャーが入ってきた。

「何してるんだ？」

「例の件で、少しですが役に立ちそうな情報を手に入れまして。」

ビリーブは話しつつも筆を走らせ、札を作っていく。

「となると、昼間はそのために出かけてたのか。　すまないな。」

「いいんです。　元はといえば僕のせいですから。　よし。」

ビリーブは札を一枚完成させ、筆をすずりの上に置いた。

「何に使うんだ？」

「ちょっとじっとしててくださいね。」

ビリーブはそう言うと、出来立ての札を指で挟み、ストレンジャーの近くへ寄せ呪文を唱えた。
ストレンジャーはその間、言われたとおりに動かずにその場に座っていた。

「ハッ！！」

ビリーブは呪文を唱え終え、札に力を送った。

札は一回強く光り、そのまま千切れ光の粒子となって、ストレンジャーの中へ入っていった。

「もういいですよ。」

「何をしたんだ？」

ストレンジャーはビリーブに問いかけた。

「さっきの札は呪いの進行を妨害する役目を持ってしまして、呪いの完了を遅れさせる事が出来るんです。　あまり長い効力は持ちませんが、時間を稼ぐことは出来ると思います。」
「少しは延命出来たって事か。　ありがとうな。」

ストレンジャーはビリーブの頭を撫でつつ言った。

「はい。　しばらくこの札で時間を稼ぎつつ、他の策を探しますね。」
「とりあえず夕飯を食べて、明日に備えなよ。」

ストレンジャーは先ほど母龍が作ったおにぎりを出し、ビリーブに手渡した。

「ありがとうございます。」

ビリーブはおにぎりを食べた。

その後シャワーを浴び、二人はベットに入り寝てしまった。

テトラクリスタルアイランド

夜、涼しい風が島に吹いている頃。
ストレンジャーとビリーブは、部屋で寝ていた。
ストレンジャーの家の近くで、口笛の音が聞こえてきた。
吹いているのはもちろん、コレージだった。

『よし。』

コレージは口笛を吹き終わると、跳躍しストレンジャーの部屋に入っていった。

窓辺に立ち、部屋の中の様子を見た。
ストレンジャーはベットに寝ており、ビリーブは隅の一角で布団を巻いて寝ていた。
コレージは部屋に足を踏み入れ、ストレンジャーの元へ。
ストレンジャーの胸の近くに、昼間と同様に黒い靄が出ていた。

『やっぱりな。 ストレンジャーが寝ていると出てくるのか。』

コレージは靄を払いつつ、ストレンジャーを見た。
先ほどの口笛で深い眠りの中へストレンジャーを送ったため、しばらくは目が覚めない。
スヤスヤと眠っていた。

コレージは振り返り、ビリーブを見た。
するといつの間にか起きており、寝ていた体制のままコレージを見ていた。

「いつも夜に現れますね。 何か用ですか？」
「ああ、同室で寝ている上。 一日で一番長い時間接しているお前なら、ストレンジャーの身に
起こった事を知っているんじゃないか？」
「・・・何のことですか？」

ビリーブは起き上がり、毛布を布団の上に置きつつ言った。

「・・・なるほど、ストレンジャーに口封じされていたのか。」
「なぜそれを？」

コレージが不意にそう言い、ビリーブは問いかけた。

「ちょっとお前の思考を読んだだけだ。 読心術ってやつだな。」
「・・・ では、もうわかってしまったわけですね。」

ビリーブはストレンジャーのそばへ寄りつつ言った。

「何があったんだ？」
「・・・じつは、ストレンジャーさんに死の呪いをかけられてしまったんです。 自分のせいで。」
「死の呪い？ ・・・でも、なんでお前のせいなんだ？」
「ストレンジャーさんは僕の事をかばって、呪いを受けてしまったんです。」

ビリーブはストレンジャーの胸の辺りにある黒い霧を見つつ言った。

「なるほど、そのせいでその霧が出ていたのか。」
「コレを確認するためにわざわざ？」
「ああ、お前なら知っていると思ってな。 ストレンジャーから聞くのは引けたからな。」

「コレージさん。 お願いがあります。」

ビリーブはコレージの方へ振り返り、言った。

「僕は何とかしてこの呪いを打ち砕くための手立てを探します。 コレージさんはその間、ストレンジャーさんの様子を見つつサポートをしてあげてください。」
「サポート？」
「この呪いは死ぬことに近づくに連れて、体の一部が段々と使えなくなってしまうんです。 そのうち、飛ぶことも歩くことも出来なくなってしまうんです。」

「わかった。　そこまで積極的には出来ないと思うが、力になろう。　その代わり、ストレンジャーを絶対に助け出せ。　わかったな？」
「誓います。　ストレンジャーさんを助け、死なせないことを。」

ビリーブ胸の前で拳を握りつつ、コレージに誓った。

その後部屋に日差しが差し込み、コレージは部屋をあとにした。
ビリーブは布団をたたみ、外へ出かけていった。
ストレンジャーはビリーブが出かけていく様子を薄目で見ている。

『コレージにも知られたわけか。　段々と迷惑をかけるようになっちまったな。』

ストレンジャーは起き上がり、窓辺に行った。

『でも俺も皆に心配をかけないためにも、なんとかしないと。』

ストレンジャーは部屋をあとにし、朝食を取りに行った。

その後ストレンジャーは外へ出かけ、花畑に。
花に水をやろうとジョウロを持った。
だがジョウロには水が入っておらず、軽かった。

『もう無くなったのか。』

ストレンジャーはジョウロを一回地面に置いた。

「アクアブレス！！」

ストレンジャーはジョウロに向けて放った、だが

『！！ 水が！ 出ない！』

ストレンジャーはなんとブレスを出せなくなってしまっていたのだ。
もう一回息を吸い込みなおし試したが、出せなかった。

『封印されちゃったのか。』

ストレンジャーは諦め、水泡草から水を貰い花へ水をやった。

その様子を、コレージは森の一角から見ていた。

『属性息吹が使えなくなったのか。 呪いは進行しているみたいだな。』

コレージは少々悔やみつつ、ストレンジャーの様子を見ていた。

オリエンタルシティ

一方ビリーブはというと、昨日とは別でもっといろいろな本を置いている国立図書館へ出かけていた。

昨日同様に役に立ちそうな本を探し、読んでいた。

『うーん。 コレもダメですね。』

ビリーブは読んでいた本を棚へ戻し、別の本を読み始めた。
すると、

コンコンッ

不意にビリーブの後方から物音がし、物音のした方を見た。
すると窓の外にソニックが立っていた。
ビリーブは窓を開けた。

「ようビリーブ。 何してるんだ？」
「ちょっと探し物をしてるんです。」
「ずいぶんと古い本だな。」

ソニックはビリーブの持っていた本の表紙を見つつ言った。

「で、何を探してるんだ？」
「それは・・・」

ビリーブはちょっと困った顔をしつつ考えていた。

「言いたくなかったら別にいいよ。 探し物、頑張れよ。」

ソニックはそう言うのと走ってどこかへ行ってしまった。
ビリーブはソニックの姿が見えなくなるのを確認し、窓を閉めた。

『そろそろ皆さんにバレてしまいそうですね。 黙ってても顔に出てしまうみたいですし。』

ビリーブは持っていた本を再び読み始め、手がかりを探し始めた。

報告

オリエンタルシティ

時刻は夕方。

古い書物の保管されている部屋へ入る許可を貰い、ビリーブは一人少々カビ臭い部屋で本を読んでいた。

持ち出しが禁止されているため、ビリーブは鼻に付く匂いを少しでも抑えるためマスクをしつつ読んでいた。

『ふう。』

ビリーブは読んでいた本を閉じ、本棚に戻した。

『少々読みましたが、ダメですね。』

ビリーブは増大な本の山を見つつ呟いた。

コンコンッ

すると部屋の入り口からノックの音がした。

「ビリーブさん。 そろそろ閉館ですので。」

やってきたのは図書館の管理を任されている女性だった。

「あ、はい。 わかりました。」

ビリーブが返事をする、女性は扉を閉めた。

『また明日、来ることにしましょう。』

ビリーブは一時部屋をあとにした。

「どうだった？ 探し物はみつかりました？」

ビリーブが部屋を出ると、先ほどの女性がビリーブに問いかけた。

「いえ、まだ見つかってません。」

ビリーブは付けていたマスクを取りつつ、女性に言った。

「また明日来ますので、いいでしょうか？」

「いいわよ、子供が興味を持ってくれているこ良いはい事だもの、断ることはしないわ。 ましてや探し物だもの。」

女性は笑顔でビリーブに言った。

「ありがとうございます。 それでは失礼しますね。」

「またいらしてくださいね。」

ビリーブは女性にお辞儀をし、図書館をあとにした。

テトラクリスタルアイランド

ビリーブが島へ戻ると、空はもう夜になっていた。

「ただいま。」

「おかえりビリーブ。」

ビリーブは家へ入ると、ストレンジャーが出迎えた。

「夕飯出来てるぜ。」

「ありがとうございます。」

ビリーブはストレンジャーにそう言うと、シャワーを浴びに行った。

その後夕飯を終え、ビリーブは部屋に戻っていった。
ストレンジャーも食器を洗い終え、部屋へ戻っていった。
部屋に戻ると、ビリーブが部屋の隅に丸くなっていた。

「ビリーブ。」

ストレンジャーは丸くなっていたビリーブに声をかけた。

「ストレンジャーさん。」

ビリーブが顔を上げると、涙目になっていた。

「どうしたんだ？」
「ごめんなさい・・・」

ビリーブは涙を拭きつつストレンジャーを見た。

「今日は、収穫がありませんでした。」
「いいんだ。 気にするなよ。」

ストレンジャーはビリーブの横に座りつつ言った。

「こんな調子じゃ、ストレンジャーさんの命なんて救えない。 呪いを打ち碎けない。 狛犬として失格です。」
「狛犬失格じゃないよ。」

ストレンジャーはビリーブの肩に手を置き、ビリーブを引き寄せた。

「お前は俺のために頑張ってる。 出来る限りの努力をして、俺のために頑張っている。 それだけでも十分だよ。」
「ストレンジャーさん。」

ビリーブはストレンジャーの肩に寄り添い、話を聞いていた。

「たとえ毎日の収穫が無くても、お前は達成のために頑張ってるだろ？ 失格じゃないよ。」
「ストレンジャーさん・・・」

ビリーブは涙を流した。

「僕・・・」

「もう泣くなよ。 俺まで悲しくなるだろ？」
「うん。」

ビリーブは涙を拭いた。

「ごめんなさい。 今はコレしか出来ませんが。」

ビリーブは昨日作った札を出し、ストレンジャーに力を掛けた。
光の粒子となった札は、ストレンジャーの中へ入っていった。

「ありがとう。」

ストレンジャーはビリーブの肩を軽く叩きつつ言った。

その後二人は眠ってしまった。

その後何時間たったのか。
ビリーブは目を覚ました。
外からは口笛の音が聞こえてきた。

『コレージさん。』

ビリーブは布団から出て、窓から外を見た。
すると近くの木の上にコレージが立っていた。

「ストレンジャーに呪いの刃が来たようだ。」
「余り時間を稼げませんでした。 もうカウントダウンが始まったんですね。」

ビリーブがそう言うと、コレージは頷いた。

「属性息吹が使えなくなったようだ。 この様子だと明日にも、ストレンジャーは力を失いそうだ。」
「まだ・・・突破口が見つかっていないのに・・・」

ビリーブは少々顔をうつむきつつ言った。

「でも、お前はやると決めたんだろ。 負けんな。」
「わかっています。」

ビリーブはコレージにそういわれると、顔を上げた。

「明日も情報を探しに行ってきます。」
「俺も引き続き監視する。 頑張れよ。」

コレージはそう言うと、姿を消した。
ビリーブは部屋に戻り、ストレンジャーの姿を見た。
昨日までストレンジャーの胸の辺りにいた黒い靄は大きくなっており、喉の辺りまで広がっていた。

『この靄がいる所は、力が封印されるんですね。』

ビリーブは布団へ入り、眠ってしまった。

テトラクリスタルアイランド

しばらく時間が過ぎ、朝がやってきた。

ビリーブは目を覚まし布団を片し身支度を済ませ、下へ降りて行った。
するとテーブルの上にお弁当が。

「？」

ビリーブはお弁当の上にメモが乗っていることに気付き、メモを読んだ。
ストレンジャーの筆跡でこう書かれていた。

『今日も頑張ってくるんだろ？ 俺からのちょっとした物だ。 持って行ってくれ。』

そこにあったのは、ストレンジャーの作ったお弁当だったのだ。

『ありがとうございます。 ストレンジャーさん。』

ビリーブはメモとお弁当を持ち、出かけて行った。

その数分後。

ストレンジャーは目を覚まし、食事を取って外へ出て行った。
今日も花の水遣りを忘れずにした。
その後翼を広げ、空の散歩へ出かけて行った。

目的地は特に無く、いろいろな場所を飛び回っていた。

ミスティックルーインやミドルガーデン

途中トロピカルアイランドへ寄り、コレージに挨拶をしフルーツを食べていた。

その後テトラクリスタルアイランドへ向かって飛んでいた。

たくさん飛び回っていたため、時刻は夕方。

夕日を浴びつつストレンジャーは島に向かって飛んでいた。

だがもうすぐ島という所で

バサッ！

『何ッ！』

なんと翼が止まってしまい、動かなくなってしまったのだ。

ストレンジャーは動かそうと試みたが動かず、段々とスピードが落ちていった。

そして、落下していった。

『このまま落下してられるか！』

ストレンジャーは止まってしまった翼を利用して、グライダーの要領で島へ向かっていった。

島の上空には来たが飛べないため、段々と地上が近くなっていく。

『ダメか！！』

ストレンジャーが半ば諦めていると、森からストレンジャーめがけて影が飛び出してきた。

影はストレンジャーの元へたどり着くと、体を抱えた。

「！ コレージ！！」

なんと出てきたのはコレージだったのだ。

コレージはストレンジャーを抱えると、そのまま地面へ向かって落下し、地面へ激突した。

「・・・ 大丈夫か、ストレンジャー」

コレージはストレンジャーと地面の間に入り、ストレンジャーにかかる衝撃をすべて受け止めたのだ。

「コレージこそ！ 大丈夫か！？」

「心配すんな。 コレくらい平気だからな。」

コレージはそう言うと、すぐに立ち上がった。

「俺には変身能力もあるんだ。 着地場所をクッション加工にしたから衝撃をすべて無効化した。」

「そうか。 なら、いいけど・・・」

「ストレンジャーは大丈夫か？」

「ああ、おかげさまでな。 ありがとうコレージ。」

ストレンジャーはコレージに礼を言うと、その場に立ち上がった。

「俺のことを監視してたんだろ？ コレージ。」

ストレンジャーはコレージを見つつ言った。

「ああ、一昨日の昼寝の時にちょっと気になった事があってな。 狒犬に聞いたんだ。」

「そうか。 余計な心配を掛けちゃったな。」

「お前は悪くないだろ。 暗い顔すんな。」

少々俯たストレンジャーを、コレージは励ました。

「お前は俺以上にあいつを信じてるんだろ？ だったら、心配掛けるようなことはすんな。」

「・・・そうだな。 無理は禁物、だな。」

ストレンジャーはコレージに言われ、言葉を受け止めた。

その後、ビリーブが島へ帰ってきた。
昨日の残っていた蔵書をすべて読み終えたが、手がかりが無かった。

「ただいま。」
「おかえり、ビリーブ。」

昨日同様に、ストレンジャーはビリーブを出迎えた。

「お昼頂きました。 おいしかったですよ。」
「コレくらいいいよ。 今日ご苦労様。」
「ビリーブさん。 お夕飯は出来てるわよ。」

ストレンジャーとビリーブが会話をしていると、母龍がキッチンから顔を出しビリーブに言った。
。

「ありがとうございます。 ではシャワーを浴びてきますね。」

ビリーブはそう言うと、シャワーを浴びに行った。

その後シャワーを終え、食事をとり自室へ戻っていった。
ストレンジャーも同様に部屋へ戻っていった。

「今日も収穫はありませんでした。」
「そうか。 今日もお疲れ様。」

ビリーブはストレンジャーに札の力を送りつつ言った。

「明日はちょっととある場所へ行ってきますので、お夕飯はいいです。」
「じゃあランチだけでも作っておくからな。」
「ありがとうございます。」

そして札が粒子となってストレンジャーの中へ入っていった。

「じゃあ寝ようか。」

「はい。」

二人はそれぞれの寢床へ戻り、寝てしまった。

そして朝。

ビリーブが目を覚ますと、仕度を済ませ下へ降りて行った。

今日もお弁当が置いてあった。

『昨日のうちに用意してくれたんでしょうか。』

ビリーブは少々考えつつもお弁当を持ち、とある場所へ向かって出かけて行った。

セレモニースライン

ビリーブはテトラクリスタルアイランドから飛び出し、ビリーブが昔住んでいた島『セレモニースライン』に向かって飛んでいた。

『まさかあの島に戻ることにになるとは思いませんでした。』

ビリーブは破魔矢に乗りつつ目的地を目指して飛んでいた。

ビリーブは昔、セレモニースラインで家族と共に住んでいた。
狛犬の家族として住んでおり、その島には他の家族や種族は住んでいなかった。
当時ビリーブはもっと年齢が低く、立派な狛犬として過ごせるよう修行をしていた。

他の島に渡り、いろいろな事を学び力をつける修行だった。

だがある日、セレモニースラインへ戻ると家族の姿が無かった。
住居である神社の一角に行ったが、いなかった。

『お母さん？』

ビリーブが家へ入ると、なんと家族が倒れていた。

『お母さん！！』
『ビリーブ・・・』

ビリーブの母親は酷く顔色が悪く、倒れていた。
他の家族達も同様に倒れていた。

『どうしたの！？』

『ちょっと流行病にかかったらしいの。』

母犬は苦しそうに言った。

『今すぐ病院へ！』

『ダメよ。』

ビリーブは電話を掛けようとしたが、母犬が止めた。

『流行病と行ったはずよ。これ以上増やすわけには行かないわ。』

『でも！』

『私達がいなくても、ビリーブはもう修行の旅をしている狛犬よ。一人で生きていけるはずよ。返事は！』

『あっ、はい！！』

ビリーブはその場に立った。

『貴方には私達の力で守られているわ。今すぐこの島を離れるのよ。ここへ戻ってくるのは、見習いを終えるときよ。』

『・・・わかりました。』

ビリーブは母犬へ寄り添った。

『お元気で。』

『貴方もね。』

ビリーブはそう言うと、言われたとおりに島を離れていった。

ビリーブの家族達は倒れ息を引き取った。

そして3年間の修行の旅を終え、ビリーブは島へ戻ってきた。

島は余り清浄ではない空気に包まれていた。

だがビリーブは修行の旅のおかげで力が付いており、無効化した。

ビリーブは島へ上陸すると、神社の奥へ向かっていった。

「ただ今戻りました。 お母さん。」

ビリーブがそう言うと、近くに気配が。

『お帰りなさいビリーブ。 無事に修行を終えたわね。』

「ですが今自分には、大きな壁を抱えております。 まだ完璧に終えたわけではありません。 申し訳ありません。」

ビリーブはその場に座り、頭を下げた。

『いいのよ。 修行に出ていた者たちは皆、そのように帰ってきたわ。 力が足りないと。』
「僕の大切な人が、命を失う黒き呪いに掛けられ苦しんでいます。 どうか、お力を貸して下さい！」

ビリーブは座ったまま、言った。

『今となっては貴方が私達狛犬の最後の一人。 私達の全霊力を、貴方に託します。 覚悟はいいですね？』

「もちろんです。」

『わかりました。』

母犬はそう言うと、部屋中に気配が充満した。

ビリーブは姿勢を変え、肩膝を付き頭を軽く下げた。

『我が一族の力。 受けたまえ！！』

母犬がそう言うと全気配がビリーブ目掛けて突撃し、ビリーブを突き抜けていった。

「クアァアアッ！！」

ビリーブはその突撃をすべて自分の体で受け止めた。
そしてビリーブはすべてを受け止めると、その場に崩れた。

テトラクリスタルアイランド

ビリーブが出かけて行って数時間と数分後。
ストレンジャーは朝を迎えた。

『朝を迎えられるか、少々不安になってきたな。』

ストレンジャーはベットから起き上がり、窓の外を見た。
暖かい日差しと風が吹いており、気持ちのよい陽気だった。
ビリーブの寝ていた場所を見ると綺麗に布団がたたまれており、布団には暖かさが無かった。

『ずいぶん前に出て行ったのか。 頑張れよ。』

ストレンジャーは朝食を取りに出て行った。
朝食を終え、花畑に出かけていった。
そして花に水遣りを終えると、再び家の方へ。

「ようストレンジャー。」

家へ帰ると、ピスフリーが立っていた。

「ようピスフリー。 どうしたんだ？」
「特に用は無いよ。 最近顔を見てないなって思ってな、会いに来たんだ。」
「そういえばテイルス達にもあってなかったな。」

ストレンジャーはここ数日の行動を思い出しつつ言った。

「じゃあ会いに行こうぜ。俺も会いに行きたかったし。」

「わかったぜ。」

ストレンジャーとピスフリーは泉の庭園へ向かい、ワープゾーンを抜けて行った。

ミスティックルーイン テイルスの工房

ワープゾーンを抜け、ストレンジャーとピスフリーはテイルスの工房へやってきた。

「テイルスー」

「あ、ストレンジャー、ピスフリー。 いらっしゃい！」

テイルスは笑顔でストレンジャーの元へやってきた。

「しばらく来てなかったからな、遊びに来たぜ。」

「僕も会いたかったんだ。 奇遇だね。」

「よう。 久しぶりストレンジャー、ピスフリー。」

玄関で話をしていると、奥にいたソニックが声をかけた。

「ソニックも来てたのか。 久しぶり。」

「なあストレンジャー 最近ビリーブ何してるんだ？」

ソニックはテイルスに出してもらったと思われるドリンクを飲みつつストレンジャーに問いかけた。

「そういえば最近ビリーブも見えてなかったな。 何してるんだ？」

「ビリーブか？ ああ、最近調べ物をしてるんだ。」

ストレンジャーはそのまま答えた。

「調べ物？」

「ああ、ちょっとな。」

「何の調べものかしってるか？」

「さあな。」

ストレンジャーはソニックに言いつつそばへ行こうとした。

だが、

クラッ

『クッ、このタイミングか・・・』

ストレンジャーは体制を崩し、床に倒れた。

「ストレンジャー！？」

テイルスは倒れたストレンジャーのそばに寄った。

「大丈夫！？」

「・・・ああ、ちょっとふらついただけだ。 心配すんな。」

ストレンジャーはゆっくり立ち上がった。

「でも顔色悪いよ？」

「心配すん・・・な・・・」

すると再びストレンジャーは意識を失い、テイルスに倒れ掛かった。

「ストレンジャー！！」

「大丈夫か！？」

ストレンジャーが倒れ、3人はあわてて近くへ寄った。

すると後方から

バンッ！

扉の開く音が。

「チッ、このタイミングでか！」

「コレージ！！」

入ってきたのはコレージだった。

「何の用だ！」

ピスフリーは手にハンマーを召還し、構えつつコレージに言った。

「俺は狛犬に頼まれてストレンジャーの事を見守っていただけだ。　ちょっと厄介事があるてな。」

「厄介事？」

コレージは話しつつストレンジャーを背負った。

「詳しい話は後だ。　白虎、ワープゾーンを開け。」

「なんでお前に指図されなきゃ」

「いいから開け！！　時間が無いんだ！！」

コレージはピスフリーに怒鳴った。

「わ、わかったよ・・・」

ピスフリーはテイルスの工房にワープゾーンを開いた。

コレージはすぐさまワープゾーンに入ってしまった。

「僕も行く！」

テイルスもコレージのあとに続いた。

「俺も行くぜ！」

ソニックとピスフリーもあとに続いて入っていった。

セレモニースライン

ビリーブが意識を失って数時間。
広間に倒れていたビリーブが目を覚ました。

「う、ううん。」

ビリーブはゆっくりと立ち上がった。

『目が覚めましたか？』

「はい。？」

ビリーブは母犬の声に返事をしつつ自分の姿を見た。
するとビリーブにはいつのまにか服がまといわれており、住職のような格好をしていた。

「お母さん、これは・・・」

『貴方に力が宿った証拠よ。今まで以上の力を、貴方は持ったわ。』

「力。」

ビリーブは拳を握りつつ言った。

『さあ、時間が無いのでしょうか。貴方のお友達の命、助けておあげなさい。』

「はい！ お母さん、ありがとう！！」

ビリーブは立ち上がり、外へ向かっていった。
そして破魔矢に乗り、テトラクリスタルアイランドへ向かって飛んで行った。

『頑張rinaさいビリーブ。大切な人が、その名前を求めている限り。』

テトラクリスタルアイランド

島へ戻ってきたコレージ達。

一同は一回ストレンジャーの家へ向かい、ストレンジャーをベットへ寝かせた。

「で、ストレンジャーに何が起こったのか。 説明してもらおうか。」

ピスフリーはコレージを見つつ言った。

「狛犬の話では。 ストレンジャーは死の呪いを受けたそうだ。」

「死の呪いを！？」

「狛犬の事をかばってその身に受けたそうだ。 狛犬はそれから街の図書館を巡って、呪いを解き放つ方法を探していたんだ。 針鼠が見たのはそれだ。」

コレージはストレンジャーを見つつ言った。

「探し物って言うのはそれだったのか。」

ソニックはビリーブにあった時の事を考えつつ言った。

「それで、ビリーブは。」

「今日は遠出をしたそうだ。 街では何も成果が出せなかったから、一番期待のできる所へ向かって行ったらしい。」

「そうだったのか。」

「ストレンジャーは・・・大丈夫なの？」

テイルスはコレージに問いかけた。

「とりあえず狛犬が呪いの進行を妨害する札を毎晩掛けてたが、そろそろまずいな。」

コレージはストレンジャーの周りにある黒い霧を見つつ言った。

霧はストレンジャーの胸から足に移っており、段々とストレンジャーを霧で包み始めた。

「多分霧がストレンジャーを包み終わると、呪いの完了だな。」

「・・・死んじゃうの？」

テイルスは涙目でコレージに問いかけた。

「狛犬が間に合わなければな。」

「ストレンジャー！！」

テイルスはストレンジャーのそばへ駆け寄った。

「お願い！！ 死なないで！！」

テイルスは涙を流しつつストレンジャーの手を握った。
だが手は冷え切っており、冷たかった。

「俺たちには何も出来ないのか。」

「ただストレンジャーの最後を見ているってことか。」

ソニックとピスフリーはストレンジャーの近くへ移動しつつ言った。

「魔を払う力を持っているのは、狛犬ただ一人だからな。」

コレージも不快そうな顔をしつつ言った。

誰もがストレンジャーのために何かをしたいと願っていた。
だがどうすることも出来ず、願う事しか出来なかった。

『ストレンジャーが助かりますように。』

そう信じて。

キキキッ！！

すると外で物音が。
そして階段を駆け上がる音がした。

バンッ！

「ストレンジャーさん！！」

部屋の扉を開け、入ってきたのは新たに力を得たビリーブだった。

「ビリーブ！！」

「ストレンジャーさんは！？」

ビリーブはベットの上で寝ているストレンジャーを見つつ言った。

「まだ何とか間に合う。 出来るか。」

「はい！！」

コレージに言われ、ビリーブはすぐにストレンジャーのそばに寄った。
そして札と破魔矢を取り出した。

「少し下がっててください。 拡散させたときに降りかかるといけませんので。」

ビリーブにそう言われ、ソニック達は後ろに下がった。
ビリーブは4人のそばに寄り、床に札を貼った。

「ここにいてください。」

ビリーブはソニック達にそう言うと、再びストレンジャーの元へ。
ビリーブは札を新たに召還し、ストレンジャーの胸に置いた。
今度の札は強力なため、すぐに燃えることは無かった。
そしてビリーブは呪文を唱え始めた。

『天照の光よ、月の輝きよ。 新緑の豊かさよ、炎の暖かさよ、水の潤いよ、大地の力よ。 時の恵よ、光の力よ！ 今こそ魔を払う力として我に力を！！！！』

ビリーブはそう言い破魔矢をストレンジャーの胸の上に置いた札に向けて突き刺した。すると札は強く輝き、迫っていた黒い霧をすべて吸い込み、札の中へ入ってしまった。札はその後黄昏色に燃え、吸い込んだ闇ごと燃えつくした。一部の逃げ出した闇はソニック達の元へ迫ってきたが、札の効力で阻まれ消えてしまった。

「う、うーん。」

ビリーブが儀式を終えると、ストレンジャーは目を覚ました。

「ストレンジャー！！」

ストレンジャーが目を覚ますと、テイルスがストレンジャーに抱きついた。

「よかった、目を覚まして。」

「ゴメンな、心配掛けて。 ありがとうビリーブ。」

テイルスの背中に手を置きつつ、ストレンジャーはビリーブにお礼を言った。

「遅くなってすみません。 気を失ってた時間が長くて・・・」

「でも間に合ったんだ。 そんなことはいいよ。」

ストレンジャーはベットから降り、立ち上がった。

「大丈夫？」

「ああ。」

「改めて。 二人とも、ありがとう。」

ストレンジャーはビリーブとコレージに改めてお礼を言った。

「いいんです。 あの時に助けていただいたお礼です。」

「俺もだ。 だから礼なんてよしてくれ。」

二人は笑顔でストレンジャーに言った。

呪いはすべて解き放たれ浄化された。

ビリーブはストレンジャーの命を救うことが出来て、とてもうれしそうだった。

再びいつもの生活を、ストレンジャーは送ることが出来るようになった。

ビリーブはこれからもすることを誓った。

『大切な方を守るために、その望みを叶えるために自分は生きます。 皆さんに救っていただいた分。 いいえ、それ以上に。』

— E P I S O D E E N D —